

ニホンカナヘビとニホントカゲ(有鱗目, トカゲ 亜目)の連続死

興田喜久男* 久保田 信*・疋田 努**

Kikuo OKITA・Shin KUBOTA・Tsutomu HIKIDA : Continuous death of *Takydromus tachydromoides* and *Eumeces latiscuatus* (Squamata, Lacertilia)

ニホンカナヘビ *Takydromus tachydromoides* (SCHLEGEL) とニホントカゲ *Eumeces latiscuatus* (HALLOWELL) は、南西諸島を除き全国的に分布する普通種である(疋田, 1996; 竹中, 1996)。これら2種は和歌山県白浜町にある京都大学瀬戸臨海実験所構内では、毎年春になるとほぼ同時に出現し、構内各所に多数の個体が見られる。今回、構内の一地点で両種が相並んで連続死した際にニホントカゲの奇妙な行動が観察されたので報告する。

発見場所

和歌山県白浜町京都大学瀬戸臨海実験所構内(ゴミ集積場南に生育の桑の木とその傍らの通路の間)

発見日時

2000年4月14日午前6時30分(これ以降約4時間の間に数度観察)

発見当時の状況とその後

死亡したばかりと思われるニホンカナヘビ成体1個体のすぐ脇(約10cm間隔)に、これよりやや小形で青色がかかった尾をもつ昨年生まれのニホントカゲ幼体が見られた。ニホントカゲは生きており、靴先で触れると少し移動するが、逃げないで元の場所に帰ってきた。そして再びニホンカナヘビの死体と約10cmの間隔をあけ相並んだ。発見時点から4時間後にニホントカゲの尾が切れていた。両者とも外傷がなかったので、数日間そのままの状態で見守り続けたところ、両者とも生き返ることなく、他の動物についばまれ始めた。

考 察

成体のニホンカナヘビの死因(大きさからみて老衰死ではない)も含め、両者が相並んでいたことで、主として二つの可能性が考えられる。

(1) 両者の争いによる共倒れ。ニホンカナヘビの幼体の天敵の一つがニホントカゲであることが知られている(竹中, 1996)。今回の場合、ニホントカゲはまだ幼体であるのでその可能性としては低いだろうが、ほぼ同サイズの両個体が何らかの理由で相争った結末。(2) 瀬戸臨海実験所構内によく出没するイエネコのしわざ。両個体とも外傷をつけずに捕らえ摂食せず単にお手玉にした結果。後者については高山(私信)により頻りに観察されているが並べることはないという。その他の原因としては、何らかの病気になるいは毒物によることなども考えられる。しかし、構内で今回の発見後にも過去にも同様の事象に遭遇していないので、それらの可能性は少ないと思われる。(1)と関連するが、ニホントカゲ同士は闘争行動があり(疋田, 1996参照)、なんらかの内的な致命傷を受けた後、ニホンカナヘビの死亡場所でたまたま力つきたとも考えられる。しかし、闘争は雄の成体の間でしか生じない(疋田, 未発表データ)ので、これが今回生じた可能性は少ない。上記のいずれの場合にも、死亡したばかりのニホンカナヘビの近くにニホントカゲがあたかも戻ったようにみえた行動を見せたのは偶然であろう。

謝 辞

イエネコがニホントカゲを次々と捕らえると

いった貴重な情報を下さった鹿児島県在住の高山真由美氏に感謝します。

引用文献

疋田 努. 1996: トカゲ属のトカゲたち. *in* 千石正一・疋田 努・松井正文・仲谷一宏 編

集, 日本動物大百科5, 初版第1刷. pp. 74-78, 80-82, 平凡社, 東京.

竹中 踐. 1996: カナヘビ類. *in* 千石正一・疋田 努・松井正文・仲谷一宏 編集, 日本動物大百科5, 初版 第1刷. pp. 78-79, 82, 平凡社, 東京.

* 京都大学大学院理学研究科附属瀬戸臨海実験所 (〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町) Seto Marine Biological Laboratory, Graduate School of Science, Kyoto University, Shirahama, Nishimuro, Wakayama 649-2211, Japan

** 京都大学大学院理学研究科動物学教室 (〒606-8502 京都府左京区北白川追分町) Department of Zoology, Graduate School of Science, Kyoto University, Oiwa ke, Kitashirakawa, Sakyou, Kyoto 606-8502, Japan